

金沢大学工学部 正員 喜内 敏

前年度において、「金沢城高石垣築造の石工及びその秘伝書について」の題目で¹⁾、金沢城の高石垣を構築した石工すなわち穴生役の人々について説明し、今日残っている石積に関する諸文献名をあげたが、今回はこの文献のうちで石積技術の主たる解説書である「唯子一人傳」の内容を紹介する。

穴生村及び穴生役については、以前より城郭関係の解説書や、この方面に興味と持っている人々の間で調査研究されてきたが²⁾、最近これに関するかなり進んだ研究が発表された³⁾。

後藤文書の内、「唯子一人傳」は縦14.0 cm、横20.2 cmの大きさで、第一巻より第五巻までのもの五冊と、巻号のないもの一冊がある。第一巻～第五巻は作成した日付や作者は記入していないが、第五巻の終り近くに、「右五冊文化十二年致一見…」とあり、巻号のない別巻の終りには、「于時文政七年十一月吉祥日改、後藤彦三郎、藤原和睦謹而作之」と奥書がある。文字の形から見て同一の作者であって、初めは第一巻～第五巻のつもりのものが、後で補遺としてさらに一巻を追加して完結したものと思われる。

「唯子一人傳」は書名が示すごとく、穴生家の秘伝書であって、第一巻の書き始めの所に、元和元年初代奎兵衛(基和)が相傳したものと、後に六代の彦三郎和睦がこれらの秘伝書を家宝として校正し、代々傳受するために書いたものである、と記載してあり、なお別巻の始めにも、「石垣の秘密と書きあらわし、謹考し子孫永く傳之也」とのべている。

第一巻は25頁よりなり、大体、総説的に記述がしてある。18項目にわたり説明がしてあつて、この内の代表的なものは、城普請方と穴生、城石垣根元、石垣の三忌五禍、二祥三吉、普請の文字、石垣等々の名目、石垣損し名目、石垣の陰陽相合、石垣のかうばい、などである。石垣の三忌とは、(1)石の縁を切ること、(2)一本角石、四本角石をいい、(3)角石など石組四番をいう。五禍とは、(1)平積石地にては小石を積み、段々に大きな石を積むをいい、(2)角石、角脇も同前、(3)石の控なき石を積み、また積み方がその所に不相心をいう、(4)石垣の根本弱くして積むをいう、(5)角石角脇など割合もなくその所に不相心な組合せをいう。二祥三吉とは、築城の際の選地について、考慮すべきことをのべたものである。

第二巻は32頁で、全巻にわたり新積地形准繩極意についてのべ、38項目に分けて説明している。主要項目は、城郭の繩張、磁石をもつて方角とさめ、また鬼門のこと、地形見分、陽の繩及び陰の繩、立水の繩、地形根切、規合矩方、坪圖り、角石等組様石配り、真行草の石の配置、くり石圖り、石垣根切相着土台石下に松の枝等敷くこと、鍬はじめ、積方、矩方等餘形、石の縁のこと、鬘石、兵糧揚石垣、沼深に石垣を築くこと、角石伏形、木堀の内木めき、門台槽台長屋台天宇台石垣築極繩張、餘形、くり石圖、一の門台石垣、天宇台石垣、石の控、規合付様、など。

第三巻は31頁で、第二巻の新積地形繩張極意をさらにくわしく説明したものである。主要項目は次のようである。矩方及び規合の出し方、規合付様、石垣積留、水繩、葛繩、槽台地形繩張、石垣の高さ十五間四尺六寸、九丈、八丈二尺、六丈、四丈、三丈の各々の石わり、石垣の高さに応じた角石

角脇など、高さ五間、三間、二間の石垣角石など、石壇仕様のこと。

才四巻は50頁で、まず、石壇積方極意について記載してある。積方と五行説より説明し、山目打込、亀甲積、四方切合積、全場取積、半伐合兼半鶴半伐合、亀甲くずし、蘭伐合、布築くずし、伐合四方積くずし、面伐合、鶴目積、鏡積、野面、胴伐合など、さらに積方惣名としてこれらの積方を十一文字にて区別をしている。縄通しの事、真行草三つの事、角敷のこと、沼深水堀湖水縁橋台川縁砂浜に石垣を築く土台のこと、沼深に組土台、砂浜湖水に石垣を築くこと、などの項目をあげて説明し、これらの積方を歌におきかえて示している。

才五巻は83頁であつて、山目打込積、亀甲積、四方切合積、半鶴半切合、布築切合、鶴目積、鏡積、野面積、曲尺場取積などを絵図を用いて説明し、なお解説を付している。次に積方惣名目をあげ、石壇積方五行を表わすに付五臓の色体として説明し、規合矩方、四方角の石伏様、角石角脇伏形、真行草角などについて図解をして説明を加えている。なお組土台、はわかけ土台、さくら土台なども図解して示している。

別巻一冊は63頁で、前の五冊のものを補つたものである。巻首に穴生の心得のべ、次に、石垣の高さ別に矩及び規合の寸法を列記している。特殊の項目として、虎口の石垣の所に鈴、銅のちきりのことと、各種の積方、くり石の大小三段のこと、三獅子石のこと、石壇裏詰仕様のこと、天神七代地神五代角石十番に相当すること、獅子梁、鉄初の儀式、角石及び門台等の忌み、各種の縄の説明、経始のこと、石垣高中卑三段のこと、石垣はらみ文字のこと、各種の積方、規合割付様の秘密のことなど、さらに金沢城内における石所々の石垣について積方の名称について説明を加えている。

すなわちこの秘伝書は、穴生の先祖のことよりときおし、穴生としての心得から、城の縄張、構築全般にわたり、特に石積については、先祖よりの相伝は勿論のこと、多年にわたる経験をもつけ加え、家宝として子孫につたえるため書き残したもので、当時の技術を知るにはきわめて貴重な文献である。

参考文献

- (1) 昭和43年才23回土木学会年次学術講演会、才Ⅳ部門、Ⅳ-13、頁43~44。
- (2) 喜内敏：“築城の土木工学的考察”、日本城郭全集才Ⅰ巻、昭和36年5月、頁30~48。
喜内敏：“金沢城—その自然と歴史”（構築物）、昭和42年6月、頁43~44。
大瀬伸、鳥羽正雄：“日本城郭史”、昭和35年1月、頁564~565。
鳥羽正雄：“近世城郭史の研究”、昭和37年8月、頁287~289。
伊藤ていじ：“城とその町”、昭和38年3月、頁56~59。
伊藤ていじ：“城—知恵と工夫の足跡”、昭和40年10月、頁171~179。
田淵実夫：“日本の石垣”、昭和42年7月、頁50~53。
- (3) 藤岡謙一郎：“古近江路に浴ぐ穴太部落の歴史交通地理学的性格について”、小牧実繁先生古稀記念地理学論集、昭和43年10月、頁343~356。
北垣聰一郎：“近世城郭の石垣築成者について—特に近江穴太衆を中心として(訂補)”、城(関西城郭研究会)、No.56、昭和44年4月、頁1~25。